

いひしによりて、又春の雪の消やすきをいふなりなどといふ事にはなりしなり、萬葉集に見えし歌どもは、其讀める人々、古を去る事も遠からず、また説文等に見えし所をも併見しと見えた

ればおのづから古き義を失なはず、説文に「霰、雪也、言雪初作未成、華、圓如稷粒也」と見え、たれは、花とこそいふべけれ、萬葉集の冬の歌共、にあまた見えし事、疑ふべくもあらず、それが中にも、梅の花さへつぼめらむしてとよめるは、彼雪のいまだ華をなさざるを、かたどり云ひしなるべし、梅の

〔古事記傳七〕沫雪はたゞ雪のことなり、万葉に數えらるる多くよめる皆然り、其さまの沫に似たる

故に云なり、山川のたぎつせなどの沫は、まことに雪と似たるものにて、古歌にもさるより起れる

主とよめるを、又霰と云と云説も異に、又万葉に沫雪とよめる、皆常の雪にて、冬を

〔日本書紀神代〕始素戔嗚尊昇天之時、溟渤以之鼓盪、山岳爲之鳴响、此則神性雄健使之然也、天照大

神素知其神暴惡、至聞來詣之狀、乃勃然而驚曰、吾弟之來豈以善意乎、謂當有奪國之志歟、○中振起

弓彌急握劍柄、踏堅庭而陷股、若沫雪以蹴散、○又見古事記

〔萬葉集八冬雜歌〕太宰帥大伴卿、冬日見雪憶京歌一首、

沫雪保杼呂保杼呂爾零敷者、平城京師所念可聞、

〔古今和歌集十一〕題えらるる

あわ雪のたまればかてにくだけつ、我物思ひのまげき比かな

〔北越雪譜初編上〕沫雪 春の雪は消やすきをもつて沫雪といふ、和漢の春雪消やすきを、詩歌の

作意とす、是暖國の事也、寒國の雪は冬を沫雪ともいふべし、いかなとなれば、冬の雪はいかほど

つもりても凝凍ことなく、脆弱なる事、淤泥のごとし、故に冬の雪中は、襦袢を穿て途を行、里言に

は雪を漕といふ、水を渉る状に似たるゆゑにや、又深田を行すがたあり、初春にいたれば、雪悉く

凍りて、雪途は石を布たるごとくなれば、往來冬よりは易し、齒にくぎをうちて、下駄の暖國の沫

雪とは、氣運の前後かくのごとし、

よみ人えらるる